

イワガキの種苗生産

(栽培漁業種苗生産事業)

吉田太輔・常盤 茂

1. 研究目的

養殖用種苗として、稚貝が10個以上付着した採苗器を45,000枚生産し、配布する。

2. 研究方法

(1) 親貝養成と採卵・採精

当部で過去に種苗として生産し、海面の育成用筏で育成した貝を用いた。採卵・採精は切開法により行い、卵1個当たり精子が10個を目安に受精させた。

(2) 室内飼育

平成20年6月4日～7月7日、7月19日～8月18日、8月20日～9月25日、9月17日～10月16日に計4回行った。飼育水槽は500L透明ポリカーボネート製を46槽使用した。

ふ化幼生は飼育水槽へ収容密度が2個/ml前後になるように収容し、飼育した。

飼育水は1 μ m目合いのカートリッジフィルターでろ過した海水を使用し、飼育水温が20℃以下の場合は加温海水を用いた。飼育中はエアストーンを用いて微通気とした。

餌料は、*Pavlova lutheri*、*Isochrysis galbana*、および *Chaetoceros gracilis* を成長に合わせ3,000～15,000cells/mlを濃縮して用い、また飼育水槽内の水質の安定を図るため *Nannochloropsis* 5,000cells/mlを毎日注入した。

換水は換水用ネット（成長にあわせ40または70 μ m）を用いて毎日行った。換水量は飼育10日前後までは500L、それ以降は750Lを目安とした。水槽底に死殻等の集積が見ら

れた場合はチューブ付きガラス管を用いて、サイフォンにより吸引廃棄した。

(3) 採苗

眼点が出現する付着直前の殻高300 μ m前後に採苗器（ホタテ貝殻35枚を1組で1連としたもの）を水槽に投入した。採苗器は1水槽当たり770～840枚を用いた。

(4) 海面飼育（沖だし）

約1mmに成長した稚貝を筏枠内に延べた縄に採苗器が水面下3～4mとなるように吊り下げた。

3. 研究結果

(1) 室内飼育

室内飼育は、1回次は通気系統の不具合により水質が悪化し、付着稚貝のほぼ全数が斃死したため廃棄した。2～4回次は順調に生育した。

(2) 海面飼育

海面飼育では、全回次生産分でヒラムシおよびサンショウウニによる食害があり、15分間の淡水浴および手作業により駆除を実施した。特に2回次生産分の採苗器にはヒラムシの付着が多く見られ、食害を強く受けた。

沖だしの採苗器枚数は110,640枚、そのうち85,300枚を出荷した。残り約25,160枚は稚貝の付着数量が足らず廃棄した。

4. 研究成果

採苗器は、県内の養殖業者に水産振興協会を通じて配布された。